

ふるさと百話 98

センダイムシクイ

鳥のさえずりを、
それに似た言葉に置き換えて覚える方法

を「聞き做し」と言います。

たとえば「一筆啓上仕り候・ホオジロ」

「お菊」十四・イカル」などたくさんあります。

木の上で昆虫の幼虫や成虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりることはあまりありません。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりることはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

ゆかいで覚えやすい表し方

実際は「チヨチヨビイー」

に近い声ですが、最後のビ

ーイをグイーにしたところが味噌です。

名前のセンダイイは声からで「チヨチヨ」を千代千代と漢字にして、それがやがて千代となつたようです。地名の仙台とは関係ありません。

この鳥はスズメよりずっと小さく、ウグイスの仲間の鳥と同じく緑褐色で、胸や腹は白です。目の上に白い線があります。



▲主に木の上で暮らすセンダイムシクイ

夏鳥として、東南アジアから日本全土に渡つて来て繁殖します。主に低い山の落葉広葉樹林を好みますが、落葉地方では、カラマツなどの傾斜のある林にも生息します。

木の上で昆虫の幼虫や成虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりることはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりることはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりることはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりることはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりることはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりることはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりることはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりることはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりことはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりことはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりことはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりことはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

虫を捕つて餌にするため、水を飲む時以外は地上におりことはあまりありません。鳴く時も木の茂みです。

ふるさと百話 99

キビタキ

キビタキの雄は、のどから胸や腹にかけて、鮮やかな橙色

や黄色をしていて、緑の林の中で出会う

と、ハッとするくらい印象的な鳥です。

雌は対照的に全体灰

色で目立たない色をしてい

ます。

日本には夏鳥として、4

月下旬から5月上旬にかけ

て全国に渡ってきます。冬

はインドシナ半島など、東

南アジアで過します。

栗はわん状で、樹洞や巣箱をかけると利用します。木の裂け目などを作ります。

日本には夏鳥として、4月下旬から5月上旬にかけて全国に渡ってきます。冬はインドシナ半島など、東

南アジアで過します。

栗はわん状で、樹洞や巣箱をかけると利用します。木の裂け目などを作ります。

日本には夏鳥として、4月下旬から5月上旬にかけて全国に渡ってきます。冬はインドシナ半島など、東

南アジアで過します。

栗はわん状で、樹洞や巣箱をかけると利用します。木の裂け目などを作ります。

日本には夏鳥として、4月下旬から5月上旬にかけて全国に渡ってきます。冬はインドシナ半島など、東

南アジアで過します。

栗はわん状で、樹洞や巣箱をかけると利用します。木の裂け目などを作ります。

日本には夏鳥として、4月下旬から5月上旬にかけて全国に渡ってきます。冬はインドシナ半島など、東

南アジアで過します。



▲鮮やかな色のキビタキのオス

ふるさと百話 100

イワツバメ

9月半ば、そろそろ

ロイツバメは、南

の国に渡る準備をし

ている頃です。

人家周辺には、2

種類のツバメの仲間

がいます。ツバメと

イワツバメです。2

種類の違いは左の図をご覧ください。

ここ30年位の間に、市街地を中心

で生活する山の鳥でしたが、

崖に似た建物（ビル・学校

倉庫・歩道橋など）が増え、

それに伴い、街中へ進出し

てきました。市内の学校で

も米沢小や泉野小など、た

くさんの巣を見ることがで

きます。

ツバメが1つの建物に一

番ないと、巣の周辺にナワバ

リを持つのに対し、イワ

ツバメは巣団で繁殖を行

うので、1つの建物にいくつ

も連ねて巣を作ります。巣

の形は、ツバメのおわん状

に対し、イワツバメは出

入りする穴だけ開いている

巣を作ります。

ツバメは、右の図をご覧ください。

ここ30年位の間に、市街地を中心

で生活する山の鳥でしたが、

崖に似た建物（ビル・学校

倉庫・歩道橋など）が増え、

それに伴い、街中へ進出し

てきました。市内の学校で

も米沢小や泉野小など、た

くさんの巣を見ることがで

きます。

ツバメが1つの建物に一

番ないと、巣の周辺にナワバ

リを持つのに対し、イワ

ツバメは巣団で繁殖を行

うので、1つの建物にいくつ

も連ねて巣を作ります。巣

の形は、ツバメのおわん状

に対し、イワツバメは出

入りする穴だけ開いている

巣を作ります。

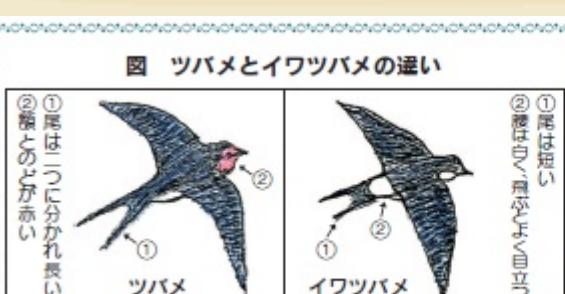


図 ツバメとイワツバメの違い



▲イワツバメの親子、手前がヒナ(米沢小にて)
(野沢 進之輔)

ふるさと再見① アオサギ

体長1m前後になるアオサギは、日本に分布しているサギ類の中で最も大きな鳥で、羽を広げると1・6mにもなります。このためよくツルと聞えられます。

翼を中心に青みがかった灰色をしているので、アオスギの名がつきました。翼を中心に青みがかった灰色をしていて、餌を見つけるとサッと伸ばして捕えます。

世界的に広く分布していますが、1980年代まで長野県では北部に限られていました。

諏訪地方へ来たのは20年前で、繁殖を始めたのは十数年前からです。茅野市では、比較的新しい鳥です。

近年、茅野市では湖東中村の稱荷宮で毎年続けて繁殖しています。4月から8月の間に、狭い範囲の高い木に集団で隣り合った巢をいくつも作ります。



▲水の中で魚を捕えたアオサギ

(野沢 進之輔)

木の枝や草を組み合わせた、皿状の大きな巣です。

アオサギは、湖・河川・

水田などの水辺に生息しています。

餌は魚が主ですが、昆虫やカエル、ザリガニなども食べます。水中に入りじつとしていたり、ゆっくり歩いたりして魚を捕ります。

長い首を曲げて、餌を見つけるとサッと伸ばして

捕えます。

ふるさと再見② イカル

イカルとは、ちょっと変わった名前です。古くは「いかるが」と呼ばれていました。

奈良の斑鳩の里で多く見かけたので、地名からイカルガとし、後にイカル

した。意識が強い鳥で写真の餌台のように一度に多数のイカルが来ることもあります。

こんな時はヒマワリの種などあつという間になくなってしまいます。

冬のイカルはとても群れ

が、内陸の川や湿地に暮らす仲間もいます。その一つがヤマ

シギです。

シギは、北海道から

本州中部の山地で繁殖し、

冬は本州、四国、九州など

に移動します。

尖石公園内の沢に、毎年

12月頃飛来して冬を越し、

3月まで過ごします。

この鳥は夜行性で、

日中は水路やぶの中

で静かにしています。

生息地が県下でも限られ



▲冬餌台に飛来したイカルの群れ

(野沢 進之輔)

れる鳥ですが、夏はやや標高の高い千m以上の山地で繁殖し、冬は人里にも下りてきて生活しています。時には市街地の餌台に来ることもあります。

ふるさと再見③ ヤマシギ

シギといえば、海

泥の中に三分の一ほど頻繁に入れ、シギ特有的早い動きでつつき回ります。

くちばしがセンサーのよ

うになっているので、泥の中の餌の動きが分かるよう

です。餌を感じると、く

ちばし全体を深く差しこみ、

捕られます。

体の大きさはハト位で、

夜行性らしい大きさと頭上の横顎が印象的です。

この鳥は夜行性で、

日中は水路やぶの中

で静かにしています。

羽の色は落ち葉や土と同じような見事な保護色をしていますので、

見つけ出すのは困難で

す。

昼間でも歩いたり、

長いくちばしを泥の中

に差し込んでミミズや

水生昆虫などを食べる

ことがあります。

活発になるのは夕方



▲昼間水路でじっとしているヤマシギ

(野沢 進之輔)

からで、まず、くちばしを泥の中に三分の一ほど頻繁に入れ、シギ特有的早い動きでつつき回ります。くちばしがセンサーのよ

うになっているので、泥の中の餌の動きが分かるよう

です。餌を感じると、く

ちばし全体を深く差しこみ、

捕られます。

体の大きさはハト位で、

夜行性らしい大きさと頭上の横顎が印象的です。

この鳥は夜行性で、

日中は水路やぶの中

で静かにしています。

羽の色は落ち葉や土

と同じような見事な保

護色をしていますので、

見つけ出すのは困難で

す。

昼間でも歩いたり、

長いくちばしを泥の中

に差し込んでミミズや

水生昆虫などを食べる

ことがあります。

活発になるのは夕方

ふるさと再見④ ペーマン

冬に出会う雄は、全身ほんのりとピンク色をしています。名前のマシコは「猿子」と表し、体の色をサルの赤い顔に見立てて付けられました。雄は全身茶褐色です。

スズメよりずっと小さく、ほつそりとしていて、長い尾を上下させる、とてもかわいいらしい鳥です。

本州へは冬鳥として渡つて来ます。夏の主な繁殖地はシベリアや中国中部などで、冬は南方へ渡ります。日本でも、北海道や下北半島で繁殖しています。

夏の北海道にいる雄は、繁殖期に現れる婚姻色で濃いピンク色をしているそうです。私はその夏の色を見たくて初夏の北海道を数回訪れました。が、会えませんでした。

豊平の土手で会うことがで

き大変感激しました。北へ帰る直前には、すでに鮮やかに変身していたのです。

低山帯の林の縁や、農耕地の土手など数の多い所で生活しています。

冬の主な食べ物はヨモギやエノコログサ、ナギナタコウジなど、こくこく小さな植物の種子です。

冬でも「フィフィフィ」と小さな声で鳴くので、声を頼りにすると見つけやすい鳥です。

(野沢 進之輔)



▲春先、鮮やかなピンクの雄

ふるさと再見⑤ ツグミ

小鳥としてはやや大きめで、味が良いため、山間地などで

は、冬のタンパク源として、網で大量に捕獲された受難の歴史を持つ鳥です。現在、この鳥は全面禁

猟になっています。

ツグミはシベリア東部などで繁殖し、中國南部や日本で越冬します。

冬季の尖石史跡公園には、ツグミが1~3

羽生息しています。ツグミに比べると数がずっと少なくて、見る機会が少ない鳥で

す。(野沢 進之輔)

農耕地やその周辺の集落や公園など広く生息しています。特に葉が落ちた明るい林を好みます。餌は雑食性で、ミミズや昆虫、木の実などを食べます。熟れたカキの実や、キハダの黒い実などを食べている姿を見かけま



▲全身赤っぽいハチジョウツグミ

ふるさと再見⑥ ミヤマガラス

このカラスは、ユーラシア大陸の中緯度地方で繁殖し、冬は暖かい地方に移動するものもいます。

日本には冬だけやって来ます。

以前は九州だけでしたがが次第に海岸に沿って北上し、今では日本各地で見られるようになります。

温暖化によって、鳥の世界にも、変化が起っています。(野沢 進之輔)

私は6年前、富士見で見たことがあります。今年1月多留姫の満月

の水田で、餌をとっている30羽位の群れに出会いました。この鳥は常に群れで行動しています。

冬の生活場所は、水田や農耕地が多く、集落近くの林にいることが多いです。

名前にミヤマ(深山)とあります。これは昔の人

が、冬だけ姿を見かけるカラスなので、きっと高い山から下りてくるのだろうと考えて付けたようなのです。

それは、カラスよりやや小さめです。

このカラスは、ユーラシア大陸の中緯度地方で繁殖し、冬は暖かい地方に

移動するものもいます。

日本には冬だけやって来ます。

以前は九州だけでしたがが次第に海岸に沿って北上し、今では日本各地で見られるようになりました。現在も暖かい西南日本に多いようです。

私は6年前、富士見で見たことがあります。今年1月多留姫の満月

の水田で、餌を探すミヤマガラス



▲水田で餌を探すミヤマガラス

ふるさと再見 7

コゲラ

コゲラはスズメ位の大きさの、かわいらしいキツツキです。日本にいるキツツキの中では、最小です。

大きな木の幹より、細い枝の方を良く利用します。声は特徴があり、「ギーギー」と高い声を出します。古い自転車が坂道を下るときのブレーキ音に似ています。

声のほかに、ドラミングといって、木をくちばしで高速でたたいて「ドドドド」と連続した音を出して、求愛をしたり、なわばりを誇示したりします。

単独か、番で生活しているが、冬はシジュウカラなどのカラ類と混群を作ることもあります。

(野沢 進之輔)



▲白と黒の模様が目立つコゲラ

ふるさと再見 8

ヨタカ

写真の木のこぶのように見えるのがヨタカです。夜行性なので、昼間は水平の枝に止まつて、目を閉じて、何時間でもじっと

しています。体の色が茶褐色と灰色のまだらで、見事な保護色をしています。止まっている木の色とそつくりで、びっくりしました。

ヨタカは東南アジアなどから4月に夏鳥として、日本各地に渡って来ます。山地の明るい林やその周辺を好みます。

宮沢賢治の「よだかの星」を読むと、ヨタカの姿や生態が正確にいきいきと描かれています。

(野沢 進之輔)



▲枝の上で休むヨタカ（電神池にて）

ふるさと再見 7

アカハラ

諏訪地方では、夏に大きな木の幹より、細い枝の方を良く利用します。声は特徴があり、「ギーギー」と高い声を出します。古い自転車が坂道を下るときのブレーキ音に似ています。

声のほかに、ドラミングと続けて鳴きます。キュウリを刻んでいる音とよく似ています。以前は山のあちこちからこの声が聞こえてきましたが、今では限られた場所でしか聞くことができません。

ツグミの仲間で、大きさはムクドリ位です。

世界的には、分布は限られていますが、冬はシジュウカラなどのカラ類と混群を作ることもあります。

(野沢 進之輔)



▲切り株に止まるアカハラ

ふるさと再見10

コルリ

日本の野鳥の中で瑠璃色や青色の鳥は、8種類ほどですが、どれもひときわ美しく、よく目立ちます。

「幸せの青い鳥」

にちなんで、大変人気があります。その中の一つがコルリです。

よく似ているのがオオルリですが、コルリはやや小振りで、喉から胸にかけ黒くはあります。比較的足が長いのは、地面を歩くことが多いからです。雌は全體にオリーブ色です。

夏鳥として、東南アジアからは、日本の本州中部以北から北海道に渡って来ます。4月末頃、まず雄が来て、なわばりを作ります。雌は少し後にして番になります。諏訪地方では低高山帯から1500m以上の亜高山帯まで広く生息しています。落葉樹や針葉樹林の中でも、下草や、低木の茂るの



▲水浴中のコルリの雄

巢は草木の根元や倒木の下や疊地に作ります。昆虫の幼虫や地上のクモやアリなどを食べています。写真は、翼の後ろの方が茶色の若い雄です。

(野沢 進之輔)

多い林を好みます。小泉山では、よく声を聞きます。

草や藪の中での地上生活のため、姿を見られるのは、まれです。けれどもさえずりの声は大きく、よく響くのでいることが良く分かります。コマドリに似て「ヒンカラカラ」とか「チヨチヨチヨ」とか鳴いますが、「ヒヒヒヒ」と前奏が入るのが特徴です。

日本では北海道から九州まで生息していて、諏訪地方では一年中見ることができます。

人家の周り、農耕地、雑木林、河原、草原と幅広く分布しています。名前のカワラも、河原によく群れているからきています。

大きさはスズメ位です。全体に緑がかたつ褐色ですが、翼の一部が鮮やかな黄色をしています。翼を広げると、内側が黄色なので一層目立ちます。

夏鳥として4月の下旬から5月にかけて、中国南部から日本に渡って来ます。

繁殖地はロシアのサハリンと日本に限られています。生息地はおもに標高1500m以上の亜高山針葉樹林帯ですので、茅野市では八ヶ岳など高い山に行かない出でません。沢沿いの林に多くいて、コケがたくさん生えていたり、大きな岩

ふるさと再見11

カワラヒラ

雄は「ビーンビーン」とさえなります。

餌は一年中、イネ科、キク科、マメ科、タデ科などの種子だけを食べています。ヒマワリを栽培するとよく集まってきて、種子が熟した順にほじくり出して食べてしまします。

ほとんどの小鳥はヒナに虫を与えるのに対して、この鳥は種子だけしか与えません。このため、親は食道の後ろにある袋に溜め戻して、ヒナに口移しで与えます。

(野沢 進之輔)

（野沢 進之輔）

この鳥のさえずりは「ヒンカラカラ」と高くよく通る大きな声です。鳥の中での名手とも言われています。この声が馬のいなきに似ていることから、「駒鳥」と名が付きました。駒とは馬の別名です。

巣は岩の間や木の根元の穴などで、薄暗い地点に作ります。スマメよりやや大きい鳥で、頭部の茶色みを帯びた橙色が良く目立ちます。



▲水を飲みに来たカワラヒラ

ふるさと再見12

コマドリ

がゴロゴロあつたり、穴があつぱい空いている大きな木の根があつたりする場所を好みます。

食べ物は、昆虫、クモ、ミミズなどで、飛びついて餌を捕らえます。コケが必要なのは、その中に虫がたくさんいるからです。



▲尾を上下によく振るコマドリの雄

の地鳴きは一年中、「ギリギリ」とか「コロコロ」です。春先から夏にかけての繁殖期に、

繁殖地はロシアのサハリンと日本に限られています。生息地はおもに標高1500m以上の亜高山針葉樹林帯ですので、茅野市では八ヶ岳など高い山に行かない出でません。

沢沿いの林に多くいて、コケがたくさん生えていたり、大きな岩

ふるさと再見13

カワガラス

カラスの仲間ではありませんが、カラスみたいに黒っぽくて、川に住んでいるという名前です。色は黒いです。ムクドリよりやや小さいくらいの鳥です。

食べ物は水中にすむトピケラやカワゲラやカゲロウなど水生昆虫の幼虫だけです。川の中の虫を食べるのには、この鳥以外あまりいません。

川の中に潜るためにずんぐりした体形、水をはじくよう密生した羽毛、空気をためる羽、油でぬれた羽、スポンジのようになり回れるように、体ができます。

進化してきた中で、地球上の食べ物が、ほかの鳥と重ならない



▲清流で暮らすカワガラス

いように、うまくすみ分けてきた結果なのです。

川の上流の岩の多い清流に、一年中住んでいます。

繁殖は早く、3月には開始します。巣は水辺近くの岩の間や、滝の裏側、橋たや、水門の隙間などに作ります。

繁殖期以外は一年中ほぼ同じ場所で暮らしていく、雄も雌も別々の繩張りを持っています。「このため、雄も雌も「ビッビッビッ」と锐いさえずりをします。

(野沢 道之輔)

シロハラ

山地の広葉樹のやや暗い林や、沢沿いの湿った林を好みます。時には、畑や人家周辺でも見かけますが、あまり開けた場所へは出てきません。

冬は単独で生活し、地上で落ち葉の下などから、ミズや虫を探して食べています。カキヤリングなどの果実も、地上に置いておくと、食べにくることがあります。

夏は日本海に面したロシアのウスリー・アムール地方で繁殖し、暮らしています。

シロハラの名はお腹が白いことからきていています。お腹の色が白い鳥の種類はたくさんいますが、同じツグミ科のアカハラ(今年8月号で紹介)とよく似ていることから、この名で呼ばれてきました。

シロハラの名はお腹が白いことからきていています。お腹の色が白い鳥の種類はたくさんいますが、同じツグミ科のアカハラ(今年8月号で紹介)とよく似ていることから、この名で呼ばれてきました。

声は「キヨツキヨツ」とアカハラに似ています。

(野沢 道之輔)

ふるさと再見14

訂正「ふるさと再見11」のカワラヒラはカワラヒワに訂正します。



▲霜柱の朝、餌を探すシロハラの雄

シロセンバイ

紋付のような白い斑があり、「ヒッヒッヒ」と澄んだよく通る声で鳴きますが、間にくちばしで「カタカタカタ」と音を出します。この音が火打石をたたく音に似ていることから火焼きと名がついたという説もあります。

冬は雄も雌も、なわばりを持つて単独で暮らしています。

冬は雄も雌も、なわばりを持つて単独で暮らしています。

ふるさと再見15

ここ3年、諏訪地方のある場所で、夏も留まって、子育てをしています。これは、本州では大変珍しい記録で、注目されています。

(野沢 道之輔)



▲オレンジが目立つ雄

冬の食べ物は主に地上の昆虫やクモなどですが、小さな木の実も食べます。雄の頭は灰白色です。ジョウビタキのジョウ(尉)は翁の意味で、この鳥の頭の色と老人の頭の色が同じことからきています。

雄の胸から腹にかけてオレンジ色で、とても目立ちます。この色を火に見立てて火焼きと呼ばれたという説があります。

雌雄とも翼の一部に

ふるさと再見 16



ヒワとはアトリ科の鳥の総称として使われますが、ヒワと名の付く種類は少なく、ほかにカワラヒワ、ベニヒワなどがいます。

ヒワとは「ひわやか（藏弱）—細く弱いさま、きやしやなさま」からきています。漢字でも鶲と弱いが入っています。小さくて繊細な感じから付いた名前です。

ヒワのマは真と書き、最もヒワらしいという意味です。



▲雪の上で餌を食べるマヒワの雄

【野沢 進之輔】
『小鳥の水浴び』開催中
(詳細は7ページ)

山地のカラマツ林、雜木林、林の縁の草地などにいます。

食べ物はハンノキ、シラカバ、サワラなどの木の種子と、ヨモギやメマツヨイなど草の種子です。

群れ意識が強く、常に数羽で行動しています。

冬の声は「ジユイーン」ですが、一斉に鳴くとにぎやかです。

年によって渡来数に違いがありますが、今年の冬はあちこちで見ることができ楽しみです。

【野沢 進之輔】

ふるさと再見 17



人の体型のようには、鳥の種類によつてはほつそり型とかずんぐり型とかいろいろあります。

すんぐり型の代表がこの鳥です。

スズメよりずっと大きい鳥で、大きな頭から突き出たような円錐形のくちばしが目立ちます。このくちばしで、エノキやムクノキやカエデなどの堅い木の種子を割って食べます。

以前、網にかかったシメを手で外そうとした時、指をかまれ、血が出たことがあります。かむ力は30kgの力を加えたくらいといわれています。

くちばしの色は季節で変わり、冬は肌色ですが、春から夏にかけては鉛色になります。

シメはユーラシア大陸の北部やアフリカ北部に分布していて、日本本州以南では、秋



▲すんぐりした体型のシメ

【野沢 進之輔】
『小鳥の水浴び』開催中
(詳細は7ページ)

に渡ります。北海道では少數繁殖しています。春の移動はほかの冬鳥より遅く、5月頃見かけることもあります。

冬は雜木林など明るい林にいますが、人家の庭や公園などでもよく見かけます。

数羽の集団でいることもあります。冬は単独で行動します。

シメとは変わった名前ですが、「シ」と聞こえる声と、鳥を意味する「メ」からきてているという説があります。(野沢 進之輔)

ふるさと再見 18



連雀の「連」は群れて連なる様子で、「雀」は小鳥の意味です。常に群れで行動しています。

2種類あって、尾の先が緑色のヒレンジャクと黄色のキレンジャクです。

分布は、キレンジャクがユーラシア大陸から北アメリカと広いのに対して、ヒレンジャクは東アジアの狭い地域に限られています。

日本には冬鳥として渡りますが、キレンジャクは中部以北に多く、ヒレン

ジャクは西南日本に多く見られます。

諫訪地方は両種とも見られ、群れの中に両方が混じっていることもあります。

年によって種類や、数や飛来時期が異なっています。

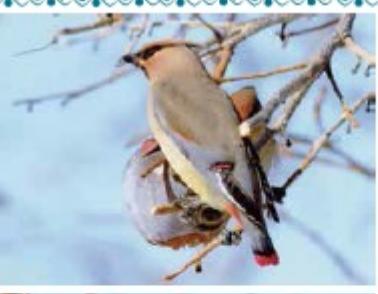
ヤドリギ、ナナカマド、ピラカンサ、カキ、リンゴなどの実を食べます。一箇所の実を食べ尽すまで留まり、無くなると移動します。

眼に黒い線があり、精悍な顔に見えます。

「チリチリチリ」と鈴を振るように鳴きます。

いつ、どこで見られるのか、冬の楽しみの鳥です。

【野沢 進之輔】
『小鳥の水浴び』開催中
(詳細は7ページ)



▲上ヒレンジャク、下キレンジャク

【野沢 進之輔】
『小鳥の水浴び』開催中
(詳細は7ページ)

ふるさと再見 19

セグロセキレイ

セキレイのなかまは、水辺やその周辺において、長い尾を盛んに上下に振るので、目につきやすい鳥です。

セグロ(背思)は背が黒いことからで、セキ(鶴)は背のことです。セキ(鶴)は冷たく澄んでレイ(鶴)は冷たく澄んでいることで、背筋がビンと伸びた姿を表しています。

鳴き声は「ジャチ、ジャチ」と漏つた声を含み「チーチョイジヨイ」などとも鳴きます。

冬は林などに場を持ち、日中は川や水辺で単独か番で過ごし、餌の確保のため冬もなわばりを持ちます。

(野沢 進之輔)



▲浅瀬で餌を探すセグロセキレイ

ふるさと再見 20

ヒバリ

名前がよく知られている割に姿を見かける機会が少ない鳥です。ズメよりもっと大きく、ずんぐりとしていて、全身茶褐色です。

ヒバリの生息条件として、草原、農耕地、河原など、広大な開けた場所が必要です。さらに丈の短い草がまばらに生え、露出した地面の多い乾燥地を好みます。畑地も似たような環境です。

ヒバリは、高利貸しに苦しめられたヒバリが恨んで空で鳴いているという昔話をからけています。空中で鳴くのは巣作りまで、それ以後は地上でもさえずります。

(野沢 進之輔)



▲頭上の長い羽を逆立てるヒバリ

ふるさと再見 21

サンコウチョウ

日本各地に渡ってきます。冬は東南アジアなどへ渡ります。

生息条件として標高千m以下で、豊かな広葉樹林と人工林を含む針葉樹林などの暗い林が必要とされます。

カツコウなど、鳴き声から名が付いた鳥がいます。この鳥もその一つです。

「ツキ(月)・ヒボイボイ」とさえずるので月日星の三つの光で「三光鳥」といわれています。雌も時々さえずります。

食は草の根元など、地上につくります。

長い尾と、くちばしや目の周りの鮮やかな水色が印象的です。見てみたい鳥の中で、人気がとても高い鳥です。

尾が長いのは雄だけですが、若い雄の中には長くなっている個体もあります。この長い尾は、秋には抜け落ちるといわれています。

(野沢 進之輔)



▲セミを食べているサンコウチョウ

ふるさと再見 22

メボソムシクイ

大変小さな鳥です。漢字で「目細虫喰」と書きます。他のウグイス科の仲間と同様に全身緑がかった茶色で、目の上に白っぽい線があります。

この線を目立てて「目細」と名が付きました。虫喰いは昆虫の成虫を主食にするからです。

日本へは夏島として5月に渡ってきます。冬は東南アジアなどへ渡ります。

渡来初期は低い山地のカラマツ林や雑木林などで過ごしますが、6月になると標高1500m以上に亞高山針葉樹林に移動してそこで繁殖します。

この林では、メボソムシクイ、ヒガラ、キクイタダキ、ルリビタキの4種がすば抜けで多く、全體の種の6割前後を占めるのが特徴です。4種はそれぞれ10～15%の割合で生息しています。



▲水を飲みに来たメボソムシクイ

にいる虫や、飛んでいる虫に向かっていて、飛びついて捕られます。ですから林の中でも、ダケカンバなど広葉樹が混じった林を好みます。

さえずりは「ジユリ、ジユリ、ジユリ」と繰り返します。

「錢取り、錢取り、錢取り」と置き換えると覚えやすいでしょう。8月まで鳴いていますので麦草鳴や八ヶ岳などへ出かけた時は聞いてみてください。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 23

マガモ

マガモはユーラシア・北アメリカ大陸に広く分布し、北部のものは

冬に渡り鳥として南下します。本来、日本へは秋に全域

へ渡来し、湖、池、川、海などで冬を過ごします。

ところが、ごく少数は夏も留まって繁殖するものもいます。長野県では以前から上高地で毎年繁殖していますし、県下各地で時々報告されています。

茅野市の竜神池では、2009（平成21）年から4年続けて繁殖が確認されています。巣は池の周辺の草地です。雄の数は10羽前後です。同時に2家族が見られた年もありました。

標高の高いところは北の国の夏と気候が似ているのかも知れません。

マガモは一夫一妻で繁殖しますが、夫婦の関係は、雌が卵を抱き始めた頃に解消します。巣作り・抱卵

子育てなど全て雌のみで行います。その間雄は別の場所で、群れを作つて生活するそうです。

竜神池は狭いせいか、雄が写真のように、時々母親と雛の近くに寄つて行きました。しかし雛は、父親には寄り付きませんでした。

竜神池のマガモは、通年生息している可能性があり、今後の推移が楽しみです。

(野沢 進之輔)



▲マガモの家族、左雌、右雄

ふるさと再見 24

カヤクグリ

八ヶ岳など高山の山頂付近はごつごつした岩や砂だらけですが、こんな所で

も夏に生息している鳥がいます。それは、カヤクグリとイワヒバリです。

カヤクグリの生活場所は岩場やその周辺のお花畠がある草地と、ハイマツなどの地上を這うような低木帶です。

カヤクグリの名はカヤ

（茅・梗）の茂みの中を、潜るように生活しているからです。

夏は北海道、本州、四国の高山・亜高山で

子育てをして、冬は低山や暖地に移動する日

本だけに生息している鳥です。

カヤクグリの茂みの中を、潜るように生活しているからです。

「チリチリチリ」と低い声ですが、美しくさえずります。

(野沢 進之輔)



▲春先、沢で餌を探すカヤクグリ

ふるさと再見 25



タヒバリは全身
茶色っぽくて、ヒバ
リに似ていますが、
セキレイの仲間です。

川原や湖や池などの
水辺や田んぼなどの
農耕地にいるので、
タ(田)ヒバリと呼

ばれています。ズメより
少しきめの体形です。

夏はユーラシア大陸や北
アメリカ大陸の北部などで
繁殖し、冬はアジアやヨー
ロッパの南部へ移動します。
日本へは9月から10月
にかけて、本州以
南の各地に渡って
帰っていきます。

冬は単独か小さ
い群れで生活して
いますが、時には2
〇〇羽近い群れに
なることもあります。
です。



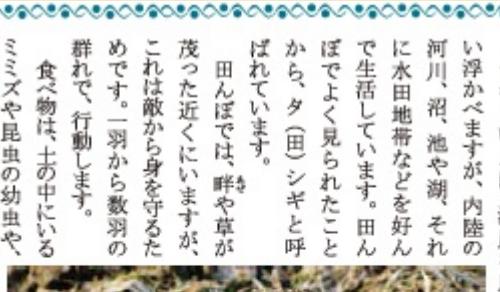
▲春先、胸が肌色のタヒバリ

(野沢 進之輔)

の種子などですが、夏は昆
虫を食べています。地上を
ちょこちょこと歩いて餌を
探します。

生活の場所は、セキレイ
などと同じように、川原の
水辺の干上がったところや、
水田の水溜りなどです。

春、北国へ帰っていく直
前のタヒバリの胸は、ほん
のりうす紅色になっています。
これは繁殖のための婚
姻色で、秋には見られません。
写真は4月に写したもので、
胸が赤みがかった肌色にな
っています。



ふるさと再見 26



タシギはオーストラリアなどを除いて、
南北の大陸に広く分布しています。緯
度の高い寒い地方で繁殖し、冬は赤道付
近の緯度の低い地方で過ります。

日本では、移動で渡る途
中の春と秋に飛来します。

本州中部以南では、越冬す
るものもいます。諏訪地方
でも、真冬に見られるこ
とあります。

以前はよく小さな川や、
水田のふちなどで見かけま
したが、最近は少なくなっ
てきましたように思います。



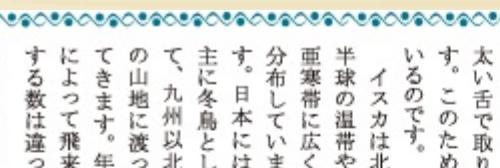
▲長いくちばしでえさを探すタシギ

(野沢 進之輔)

小さなエビ・カニなどです。
長いくちばしを泥の中に入
れ、上下に動かして探し
て捕れます。

体の大きさはハトよりや
や小さいくらいです。頭の
てっぺんと、翼にある白い線
が目立ちます。

私は聞いたことがあります
せんが、しわがれ声で「ジ
エツ」と1、2回鳴いて飛
び立つそうです。



ふるさと再見 27



鳥のくちばしは種類ごとに、形・長さ・大きさなどみな
が違っています。これ

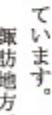
は食べ物がとりやす
いように進化してき
たからです。中でも

変わっているのが、
シギといえば、海岸を思
い浮かべますが、内陸の

河川、沼、池や湖、それ
に水田地帯などを好ん
で生活しています。田ん
ぼでよく見られたこと
から、タ(田)シギと呼ば
れています。



ふるさと再見 27



林を中心、11月から5月
ころまで、声を聞いたり、
姿を見たりしますが、出会
うことは稀です。

北海道や中部以北の山地
では、少数ですが夏も留ま
つて繁殖するイスカもいます。

食べ物が松の種子であるた
めに、冬でも繁殖することができます。私は蓼科で3

月、雪の降り積もる中、子
育て中の巣を見たことがあります。
イスカの主食は松ぼっくり
の種子です。この鱗片に
くちばしをつつ込み、こじ
がつてているのです。



(野沢 進之輔)

諏訪地方では、アカマツ
林を中心、11月から5月
ころまで、声を聞いたり、
姿を見たりしますが、出会
うことは稀です。

北海道や中部以北の山地
では、少数ですが夏も留ま
つて繁殖するイスカもいます。

食べ物が松の種子であるた
めに、冬でも繁殖することができます。私は蓼科で3

月、雪の降り積もる中、子
育て中の巣を見たことがあります。
イスカの主食は松ぼっくり
の種子です。この鱗片に
くちばしをつつ込み、こじ
がつてているのです。



(野沢 進之輔)

ふるさと再見 28

オオマシコ

冬に見られる赤い鳥として人気があり、

鳥とて人気があり、
出会えるのを楽しみ

している人が多い
鳥です。

雄の成鳥は、全
身真っ赤で、光の加
減によっては、濃い黒
っぽい赤や、桃色がかった
赤に見えたりします。若い
雄は赤みが少なく、雌は全
体に淡褐色でところどころ
に薄い赤があります。

(野沢 進之輔)



▲ハギの種子を食べるオオマシコ

見られましたが、出合える
機会の少ない鳥です。

観察地では標高千㍍以
上の明るい林や林縁の草地
や土手に生息しています。

時には高い梢にとまるこ
ともあります。

食べ物は、ズミやイボタ
などの木の実、タデ科、イ
ネ科などの草の種子ですが、
中でもハギの実を好み、こ
の木に良く集まっています。

冬は「チー」「ツイ」と
小さいですが、高い声を
時々出します。

食べ物は、ズミやイボタ
などの木の実、タデ科、イ
ネ科などの草の種子ですが、
中でもハギの実を好み、こ
の木に良く集まっています。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 29

フクロウ

大が吹える声に似ています。
目は人間と同じく顔の正
面についています。これで
すと、獲物の位置を正確に
図ることができます。正面
しか見られないかわりに、
首を180度近く回すこと
ができます。

羽の構造は、音をたてず
に飛べるようになっていま
す。これは新幹線のパンタ
グラフや風力発電などに応
用されています。

太い足に、長い鋭い爪で
獲物をわしづかみにします。

フクロウが生息する林や
森は、自然が豊かに保たれ
ています。(野沢 進之輔)



▲豊平のニワトリ小屋に迷い込んだフクロウ
(2013年12月)

よく知られた鳥で
すが、野外で見られる
ことは稀です。数が少
ない上に、夜行性であ
るからです。昼間は木
の茂みなどでじっとし
ていて、夜、ネズミや
モグラやリスやウサギ
などの狩りをします。

フクロウはユーラシア大陸の中緯度や日本に広く分
布していて、一年中ほぼ同
じ場所で生活しています。
低山から亜高山帯まで、太
い樹木のある林にいますが、
林の縁や下枝の少ないところを好みます。

里山の寺社
などにもいること
があります。太い
木の樹洞などに巢
をかけます。

繁殖期は3~5月ですが、雄
は2月ころから
さえずります。

声は「ゴロスケ
ホーホー」と言
われていますが、

ミコアイサ

雄はパンダに似て
いるので「パンダガ
モ」の愛称で呼ばれて
います。(野沢 進之輔)

ため池などで時々見かけ
ます。

観察地では毎年見られ、
力の群れに混じっていた
り、10~20羽の群れで泳
いでいたりします。

食べ物は魚や貝やエビな
どで、水中に潜ってとりま
す。一度に20秒位、深さ2
m位まで潜ることが可能
です。

冬の間に結婚する相手を
決めるため、よく雌の周り
を泳いだり、頭を振つたり
プロポーズしている雄を見
ることができます。

繁殖地はユーラシア大陸の亜寒帯で、冬は
大陸南部に移動します。
日本へは主に冬鳥とし
てやってきますが、北海道では夏にわずかで
すが繁殖しています。

日本での冬の生活場
所は、湖、沼、池、川
などで、海岸より内陸
に多い鳥です。

(野沢 進之輔)

ふるさと再見 30

ミコアイサ

なため池などで時々見かけ
ます。

観察地では毎年見られ、
力の群れに混じっていた
り、10~20羽の群れで泳
いでいたりします。

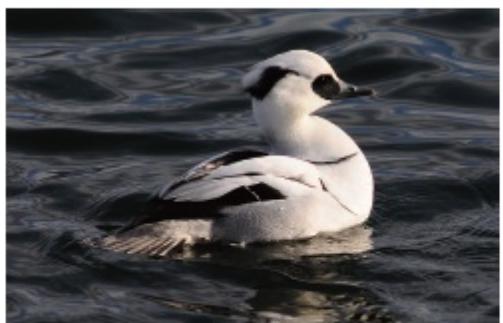
食べ物は魚や貝やエビな
どで、水中に潜ってとりま
す。一度に20秒位、深さ2
m位まで潜ることが可能
です。

冬の間に結婚する相手を
決めるため、よく雌の周り
を泳いだり、頭を振つたり
プロポーズしている雄を見
ることができます。

繁殖地はユーラシア大陸の亜寒帯で、冬は
大陸南部に移動します。
日本へは主に冬鳥とし
てやってきますが、北海道では夏にわずかで
すが繁殖しています。

日本での冬の生活場
所は、湖、沼、池、川
などで、海岸より内陸
に多い鳥です。

(野沢 進之輔)



▲パンダに似ているミコアイサの雄

日本へ渡つてくる数
は少なく、西日本では
まれです。昨年冬のよ
うな当たり年は各地で

ます。

日本へ渡つてくる数
は少なく、西日本では
まれです。昨年冬のよ
うな当たり年は各地で



▲ハギの種子を食べるオオマシコ